

令和4年度（2022年度）

浦和明の星女子中学校入学試験問題
(第一回)

国語

(50分)

注意

1. 試験の開始まで問題用紙を開かないこと。
2. 問題用紙は全部で12ページある。試験開始と同時にページ数を確認すること。
3. 答えはすべて解答用紙の決められたところに、はっきり書くこと。なお、解答用紙の※印欄のところは記入しないこと。
4. 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書くこと。
5. 印刷のはっきりしないところがある場合は、手をあげて係の先生にきくこと。
6. 字数制限のある場合は、句読点も一字と数えて答えること。

受験番号	
------	--

一 次の文章を読み、後の問い合わせに答えなさい。「 」内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

外見とはどのようなことを意味するのでしょうか。字義通り考えれば、「外」から見える人の姿ということでしょうか。「外見を気にする」とは、まさに見た目で判断される自分の姿、自分への評価に敏感になるということです。誰がどのように考えようか自分は自分だとも言えますが、そう簡単なことでもなく、私たちは常に「他人からの視線」に対抗する「術」を考え、実践しているのです。そして私たちが日常の差別や排除を考えるとき、外見という問題もまだ重要な手がかりです。本章では、外見をめぐり、語つてみたいと思います。

ゼミの男子学生が髪をテークに卒業論文を書きました。内容は日本や西洋における髪の社会史をまとめたのですが、彼にとつて卒論は自分の髪への「鎮魂」〔魂をしめる〕歌でした。彼は、ゼミにはよく手入れされた黒々とした髪を蓄えて現れました。ゼミだけでなく大学の日常も髪を蓄えた姿は特に違和感もなく、何の支障もなく彼は過ごしていました。しかし、大学を卒業し社会人になるタイミングで、彼は見事な髪に別れを告げなければならなかつたのです。

〔中略1〕
日常生活世界を解説した社会学者A・シュツツによれば、私たちは普段「類型」に準拠して「よつて」他者を理解し、「類型」は私たちがそれまで蓄積してきた「知識在庫」に依存しています。たとえば先の男子学生が卒業して社会に出ると「サラリーマン」となります。「サラリーマン」という「類型」は、アイコンが効いたしわのないワイヤーシャツに趣味のいいネクタイを締め、落ち着いた色のスーツを着て、にこやかにお客様に対応するといった実際の場面に即応した常識的知から構成され、そのほとんどが外見、見た目に関連したものと言えます。より外見に徹底した「類型」といえば、「就活〔就職活動〕する大学生」を思い出します。個々の学生がどのような人間性を持ち、どのような思想をもつてゐるのかなど、「内実」に「一切関わりなく、就活スーツ」に身を固め、清潔な髪形に整えた瞬間、彼らは「就活する大学生」に変身してしまいます。

人間は外見や見かけではなく、その中身が大事だ、という考えを否定する人はまずいないでしよう。そうでありますから同時に私たちは普段、いちいち目の前にいる他者の「なまみ」や「こころ」を気にして、生きているわけではありません。他者の「内実」ではなく、他者の「外見」をもとにして、その場その時に応じて、目の前の人とは完全に他の乗客や外界の音や様子を遮断しているのではなく、聞こうと思えば聞けるし、見ようと思えば見えるからであり、そうした外界との繋がり方を意味しています。

さきほど電車内で人々が適切に「距離」を保つことが電車の秩序にとつて重要なと述べましたが、満員電車のように「距離」を保つことが困難な場合、私たちはどのようにして自分を守り、自分と他者との繋がりを維持しようとするのでしょうか。ゴフマンの発想を借りて、私はこう考えます。

私たちは、自分を守る「膜」とでもいえるものを持つています。それは状況によって堅牢な「殻」となるかもしませんが、薄く、破れやすく、誰の目にも見えない透明な「膜」です。そして満員電車のようないく間に人が過剰に密集してしまったとき、当然「距離」の維持は難しく、さらに「膜」さえもお互いに触れ合い、擦りわせる〔原文のまま〕ことで、破れてしまう危険に私たちはさらされます。そのような状態のなか、別に私は見たくありません。結果として隣の人が懸命に維持しようとしている自分が困ってしまうのは、隣の他者の「膜」をなんとか破らないように注意を払い、その場でいろいろとあるまつても、「膜」の向こうにある他者の世界が「見えてしまふ」からです。LINEのやりとりや個人で検索している情報やゲームの様子など、別に私は見たくありません。結果として隣の人が懸命に維持しようとしている「自分だけの世界」を「侵犯」してしまった危うさを感じるからなのです。

自分の「膜」を守りつつ、他者の「膜」つまり、他者の私的世界を侵犯しないこと。これこそ、私たちが日常しっかりと守っている最大の〔③儀礼〕と言えるでしょう。そしてこの儀礼を行使することに外見が密接に関連しています。

自分の「膜」を守りつつ、他者の「膜」つまり、他者の私的世界を侵犯しないと

実践しているのです。だからこそ、外見を考えることは、日常における他者との出会いや他者理解を考えるうえで、とても重要な営みだと言えるでしょう。①「たかが外見、されど外見」なのです。

「されど外見」を考えるとき、私たちは普段、他者とのように向きあつてゐるかをじつくりと見つめる必要があります。そしてこれは、ゴフマンという「風変わった社会学者が生涯テーマとした「共在=他者とともに在る」と」を考え、そのありようを解説する営みと密接に関連しています。ゴフマンは、人間が他者と共にいる営みや複数の人間からできる集まりには、それ自体固有の「秩序」がつくれ維持されているという事実を明らかにしています。「相互行為秩序〔the interaction order〕」といふものです。

〔X〕、私たちは電車に乗つてゐる時に、どのような秩序を維持しながら過ごしますか。私がまず思いつくのは「他者はじつとみつめない」というルールです。どんなに目の前の座席に座つてゐる人が魅力的であると私はその人をじつと見つめたりはしません。でもやはり気になる時は、その人だけを「チュウシするのではなく、他の光景も眺めているぶりをしながら、それとなく見るでしょう。ゴフマンの言葉を借りれば、それは「焦点をあわせない〔unfocused〕」見方であり、こうした秩序が維持されているのは「焦点をあわせない人々の集まり」であり、電車のような公共的な空間で「テンケイ的にみられる現象です。〔Y〕私に限らず乗り合わせた多くの人は、電車の中では、特定の誰かに焦点をあわせないで、焦点をぼかしながら、周囲の乗客の姿や様子を見るともなく見つめています。ゴフマンに言えば私たちは、他の乗客との「距離」を絶妙に保ちながら、自分の場所を維持しつつスマホに熱中したり音楽を聴いたり本を読んだりしてます。ゴフマンに言わせれば、新聞や週刊誌や本は、他者との「距離」をとり、「距離」を保つていてこと、言い換えれば自分は他者に對して関心はないし、他者という存在へ関与するつもりもないことを周囲の他者に表示するための「道具」なのです。もちろん今はスマホこそ最適な「道具」です。

ただこうした視線の取り方や「道具」が通常に機能して電車内の秩序が維持されるとしても、それが危うくなる状況はいくらでも起つります。満員電車に乗つて、私はいつも気になり、どうしようか困つてしまつことがあります。それは隣に立つてゐる人や席に座つてゐる人が熱中するスマホの画面が「見えてしまふ」ことです。見たくなければ目を閉じればいいだけですが、満員で身動きもままならないとき、目を閉じ続けると不安定な状態になるし、さりとて他に視点をあわせることもなく、乗客の様子を細かく観察してます。

〔中略2〕
外見で他者を判断し、また外見で自分自身を判断してもらうことは日常では必要な営みです。だからこそ外見を整え、その場その時に応じて印象操作し、自己呈示することは生きていくうえでの基本です。同時に、外見から「適切に」他者を判断し、他者に感應することは、とても重要であり、日常生活でいくうえで回避し得ない営みなのです。

外見による「決めつけ」を崩していくためには、どうすればいいのでしょうか。「ぱつちやり」女性の意識改革、生き方改革を実践する『ラ・ファーフア』〔雑誌名〕の戦術や戦略は参考になると思います。また厳しい告発ではなく、私たちを少しづつ巻き込んでいく「マイフェイス・マイスタイル」〔団体名〕の活動もまた、実はラディカル〔根本的〕な営みであり、私たちが「普通」に呪縛され「しばりつけられ」ている事実を鋭く突きつけてくれます。

どちらからも学ぶべき共通点があります。それは「普通」の呪縛から自分自身を

解き放つプロセスがもつ意味を自らの脳に落とすことです。

「普通」の呪縛から自分自身を解き放つこと。それは私たちが「普通」からまつたく離れてしまうことではありません。「普通」とはいわば空気のようなものであり、私たちはそれこそ命を終える瞬間まで付き合わざるを得ないのです。

それは、もちろんの因習や伝統、習慣といった「惰性」から「普通」を切り離し、新鮮な視点で「普通」を丁寧に見直していく作業ともいえるでしょう。そして見直す過程で私自身の他者理解やものの見方を制限したり妨げている知を見つけ、それを自分にとつてより有効な知へと変貌させることが大切なのです。言い換えれば、人間の「ちがい」をめぐる偏狭で硬直した國式を崩し、より緩やかでそれを対立させたり排除せたりしないような形で「ちがい」を認める新たな価値や國式を徐々にでも創造していく営みといえるでしょう。

(好井裕明著『他者を感じる社会学 差別から考える』より)

問1 太線部a 「チュウシ」・b 「テンケイ」を漢字に直しなさい。

問2 次は、傍線部①「『たかが外見、されど外見』と言える理由について説明し文です。空欄に入る最も適切な表現を、I・IIIについては傍線部①以前の本文中から指定の字数で抜き出し、IIについては後の選択肢から選び、それぞれ答えなさい。

〔選択肢〕

A ルール B データ C トータル D パターン
外見ではなく中身が大事だと言われることが多いが、私たちは蓄積してきた「知識在庫」つまり「I(漢字四字)」をもとにして、人々を外見から「II」化し、他者の「III(漢字三字)」までも推測しようとする現実があるからである。

〔選択肢〕

A ルール B データ C トータル D パターン
A ルール B データ C トータル D パターン

問3 空欄X・Yに入る適切な語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア もし イ つまり ウ しかし エ たとえば

問6 傍線部④「状況に応じて必要だとされる外見を整えること」について、次の各問に答えなさい。

(1) 次は、傍線部④について説明した文です。空欄に入る最も適切な語を2ページの本文中から四字で抜き出し、答えなさい。

その場の状況に合わせて「外見を整えること」とは、見せたい自己を呈示することと、つまり□をするという営みである。

(2) 傍線部の例としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小児科の看護師が、威圧感を与えないように淡く優しい色あいの服を着て子どもに接する。

イ サッカー観戦をする時、応援するチームのユニフォームを着て周囲との一体感を出す。

ウ 友達の誕生パーティーで自分の苦手な料理が出てきたが、おいしそうに全部食べきった。

エ いつもお手伝いをしないが、親戚で集まつた時には自分から進んで食器の片づけをした。

オ 健康診断の前日に夕飯の量をいつもよりも少なくして、体重測定で数値を下げた。

問7 傍線部⑤「人間の『ちがい』をめぐる偏狭で硬直した國式」を端的に述べた表現を〈中略2〉以降の本文中から七字で抜き出し、答えなさい。(記号も一字と数えます。)

問4 傍線部②中の「回避」を具体的に説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア スマホに集中することで、満員電車の中でも自分の個人情報を周囲から守り、同時に他人の情報をうつかり見てしまう事態も避けることがあります。

ウ 満員電車の中でスマホを手にしていることで、危険を感じるような時がある場合、すぐに誰かに助けを求められる状態にあることを周囲にアピールするといふこと。

エ 満員電車の中でスマホだけを見ることで、他人からの視線を浴びる緊張から逃れ、また他人と目を合わせないことで相手に対しても気まずい思いをさせないということ。

問5 傍線部③「儀礼」について、次の各問に答えなさい。

(1) ここでの「儀礼」の意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 友人の部屋へ遊びに行つた時に、長い間貸したままになつていた漫画本を見つけたが、特に返却を求めなかつた。

イ 図書館での自習中、隣の座席に自分の荷物を置いていたが、席が埋まつたので邪魔にならないように荷物を預けた。

ウ 買い物中、他人のカゴの中に欲しかつた商品を見つけたので、その人に売り場をたずね、礼を言つて自分も同じ物を購入した。

エ バスに乗り合わせた人のおしゃべりがうるさかつたため、その声が聞こえないようになつたが、イヤホンをはめて大音量で音楽を聴いた。

問8 〈中略2〉以降の本文において、筆者は「普通」をどのようにとらえていますか。適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「普通」とは、「惰性」により人々が作り出したものにすぎないため、一切信頼せずに自分の持つている価値観を貫くことが大事である。

イ 私たちの多くは「普通」にとらわれているが、努力によってそのとらわれから離れて、自分自身で決して無駄な営みができる。

ウ 「普通」を見直したとしてもそれは次なる「普通」を生み出すことにはなるが、見直す行為は差別を減らす上でも決して無駄な営みではない。

エ 「普通」は空気のようなものであり、それに抗うことはできないため、「普通」から離れようとせず、うまく付き合っていくことが現実的である。

オ マスメディアによつて画一的に作り出された「普通」に私たちは影響される傾向があるため、できるだけマスメディアに触れないことが望ましい。

— 4 —

次の文章は、秋ひのこ作「はしのないせかい」の一節です。本文を読み、後の仕事ができこそ男として一人前という考え方を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

高校一年生の「樋口透風」は、小さな集落の地主の一人息子である。住んでいる集落では力あり、「世界には『端』がない」という考え方をも与えてくれた。最近では体力や認知機能にも衰えが見られるが、透風にとって大ばあちゃんはかけがえのない存在であった。もう一人、透風にとつて大切な存在として、インターネット上で活動中の「タイラ」がいた。次は、タイラとの三年前の出会いを思い返している場面である。

何だコイツ。明らかに加工していいのに、やたら綺麗な顔立ち。女子が男子かわざと混乱させるような風貌。自分の写真をこんなにもひけらかしている時点で引く。絵が上手いのはいいとして、中学生でTシャツを作つて、売り上げを寄付。プロフィールには『タイラ 中3』とあり、日本とアメリカの国旗の絵文字が並ぶ。妙に気になり、毎日検索して見ていたが、フォロー機能を使う後押しとなつた投稿は、夏休み最後の写真。透風が大ばあちゃんにもらったものと同じような、大人の頭ほど大きい地球儀に、タイラがびたりと白い頬を寄せていく。

セカイには、端がない。まるいものつてはしがない

稻妻に打たれるような感覚、というは①なまじ比喩ではないらしい。実際、背筋がびつと伸びた。背骨がカタカタとまっすぐに整い、肋骨が開く。その隙間が、昂ぶる感情で満たされていく。誰もいない納屋の屋根裏で、花柄の籠の椅子に座りなおす。汗ばんだ両の掌で小鳥を抱くようにスマホを包み、黒檀の瞳の少年をまじまじと見つめる。

その瞬間から、透風は彼のことを「コイツ」と呼ぶことを止めた。彼の名は、タイラ。まるいものにはしがないことを知る存在。

「短かつたね。でもタイラのトータつて珍しいし、よかつたね」三十万人のフォロワーを持つタイラのインスタグラムライブ配信。タイラが自ら作詞作曲した新曲をギター一本で弾き語る。少しお喋りをして、今度はクリスマスの定番ソングのカバー。最後にフォロワーへ丁寧なお礼を述べ、四十分ほどで終了した。

感動しました！ 新曲リプレイ待つてます！ といった感想が続々と上がる。それはずごく――。

そうして迎えた今年のクリスマスは、人生で一番楽しいクリスマスだった。百均で買ったというサンタのとんがり帽子を脱いださつきの表情は、晴れ晴れとしていた。その生身の人間の温度が波紋となり、透風の深い部分を刺激する。透風は自分もこの時間が本当に楽しかったのだと、やわらかい水が土に染み渡るように、喜びが静かに胸に広がっていくのを感じた。その喜びが、「いいね！」にすら安易に変換できない、④心の奥底に閉じ込めていた気持ちをそつと外に引き出す。

「新曲、すごく、感動しました。タイラが、フォロワーのことを大事に思つて声をかけてくれるのも、ほんと嬉しい、泣きそうになりました。タイラのファンで、よかつた」言つたそばから、本当に目に涙が溜まり、慌てて手の甲で擦る。皮膚に、きらきらした白いものが貼りつく。さつきに施されたアイシャドウだ。

「顔もやつてることも日本人離れしてて、礼儀とかそういうの、すごく日本人だよね。ユーチューバーと違つて変なテンションもないし、逆にダレた感じもない。女子のサンタコスするかと思つてたけど、まさかの普段着だったしね」

そう、黒のニットにジーンズという出で立ちには驚いた。サンタの帽子だけはかぶつていたが。

「でも皆がこういう格好で騒いでる中、ひとりカジュアルで爽やかで、それもまたいいなつて、思いました」透風が言うと、さつきは「だよね」と笑つた。それにまた、ほつとする。こうして誰かと気持ちをじかに共有する感覚は、意を決して押し出した小舟が、温かい波にやさしく押し戻されたようで、温もりのある余韻が残つた。

境界線はタイラにとつてのキーワードで、タイラは「端」や「区別」を好みない。だから、女子の服がいいと思つたら迷わず着る。女子っぽい持ち物も使う。逆に男子っぽい格好をする日もある。自分の価値観で、世間が分けている物事を行つたり来たり。誰でもできるようでいて、現実にはそこまで割り切れない自由が、タイラにはある。

セカイはまるい。まるいものには、はしがない。

タイラが、大ばあちゃんの言葉を行動で示してくれる。身体中に沁み渡る、甘い親近感。だが、友だちになりたいとか、そんなことは思わない。この美しい人は、自分なんかつながつてよい存在ではない。だから、コメントの投稿はおろか、「いいね！」すら押さない。

②タイラは、画面のこちら側からそつと覗き見る」とができるはいい。

「女装とか、明らかに変だけど。キモいつちやあキモいけどさ。透風が言つたんじやん。本当の自分にしがみついて生きてるつて。タイラがそういうのがいいって言うから、そうするんだつて」

以前、そんなことを話した気もする。変じやない、とはつきり言つた覚えはないが、さつきはそのように解釈したらしい。

「これでも勉強中なの、私」

さつきは、腰を折つて床に散らばる服を拾い始めた。着せ替えごつこは透風だけ。

「ア自分の価値観で、いいと思うものとか、好きなことを自由にやつちやうタイラと透風から、生き方つてやつを日々学ぼうとしてんの」

「皆があんたたちみたいに常識の境界線をちよつとゆるめたら、生きやすくなりそ

うじやん。だから、協力してあげる」

境界線。そのなのだ、と透風は心で強くうなづく。まさに、水の中にいるような

そういう行きつ戻りつの自由が、いいと思うのだ。タイラからもらつたその大切な

自分をどうにもできないだけだ。

さつきは、腰を折つて床に散らばる服を拾い始めた。着せ替えごつこは透風だけ。

「ア自分の価値観で、いいと思うものとか、好きなことを自由にやつちやうタイラと透風から、生き方つてやつを日々学ぼうとしてんの」

「透風から、生き方つてやつを日々学ぼうとしてんの」

透風が知る大ばあちゃんは、気難しいところもあるが、やさしくて、透風には怒つたりしない。だから、こうなつた以上「ほなしやあないな」と言つてくれると、どこかで期待していた。

しかし、今、目の前で顔をくしゃくしゃにして、憤りを顕にする大ばあちゃんは、思うように歩けない膝に薬を煮やし、奥宮で初日の出を、という願いが叶わず怒つている。その思いを叶えであげられない透風とさつきを、はつきりと責めている。

大ばあちゃんに初めて怒鳴られた衝撃で、何も考えられなくなつた透風は、電池が切れたように冷たい地面に座つたまま動けない。さつきが「無言でスマホを取り出した。画面を確認し、かぶりを振る。電波もワイヤレスもない。

「とりあえず、私が神社に戻つてママを呼んでくる。それから……」
さつきが言いかけると、大ばあちゃんがそれを横から遮り怒声を浴びせた。

「あんたのオカンじやあかん。誠一呼んでこい。とにかく早う何とかせえ！ 夜が明けてまうわ！」

「引きつたさつきの顔に怯えが浮かび、傷ついた瞳が透風の胸を深くえぐる。険しい表情で睨みつける大ばあちゃんから目を逸らすと、さつきは「弱々しく」「じやあ、行つてくる。すぐ戻るから」と言い、来た道をひとりで引き返していくた。

透風は嫌な味がする睡を飲み込む。今ので、さつきがもう屋根裏に来なくなつたらどうしよう。大ばあちゃんを嫌いになつたら、どうしよう。

木々の奥にさつきの懐中電灯の光が見えなくなると、透風はのろのろと立ち上がり、手や太ももの土を払い落とした。頭上で幾重にも重なる枝の先を見上げる。夜空はまだ青暗い。さつきが境内にいる誰かを連れて戻つてくるのに、最低でも十五分。父を呼べば三十分以上かかるが、日の出にはなんとか間に合う。

「あれ、さあちゃんとどこ行きよつた」

ふいに、足下で声がした。大ばあちゃんがきよろきよろしている。透風は混乱した。声に、さつきまでの隙がない。さつきがいなくなつたことを、本当に疑問に思つて、いるみたいだ。

「さつきは神社に人呼びに行つた。誰か大人が来てくれたら、奥宮まで行ける。せやから寒いけど、もうちょっと待とうな」

「丁寧に言つたつもりだが、何を今さら、とつい思つてしまつ。すると、大ばあちゃんの顔から疑問がすつと消え、代わりに^⑤おもちやに飽きた子供のような表情が涙で濡れた頬が、ひりびりといつまでもしごれた。

浮かぶ。

「あの」相手が眠つてしまつ前によく、透風はぎこちなく声をかける。

「うん？」さつきが疲れた顔を向ける。

「さつき、山で大ばあちゃんが言つたこと、すみ、すみません。手も、た、叩いて」

「何で透風が謝るの」

さつきは、才雪が掌で溶けるように淡く微笑んだ。さつきが去つた後、大ばあちゃんが急に態度を変えたことを説明する。

「僕も、ついていけないんですけど、一応言つておこうと思って。そもそも悪気は、なかつたんだと、思います」

大ばあちゃんをかばうというより、さつきは何も悪くないのだと伝えたかった。うん、とさつきは応じ、背後を振り返る。雪見¹障子のガラスの奥で、布団にくるまつた大ばあちゃんが、太いびきをかいている。

叩かれた手をもう一方の手で包み、正直、ちょっと怖かつたけど、と前置きしてさつきは言つた。

「それくらい行きたかったんだろうね、奥宮に。理由を想像すると、やっぱり連れてい行つてあげたかったよね」

「理由、ですか」

「大ばあちゃん、焦つてたんじゃない？ いつまでもまた来年行けばいいやつて、言つてられないのかも。体力があつてもボケたらわからなくなつちやうし、頭がはつきしてても身体がついていかなかつたら、奥宮には行けないじやん。それに、こんなこと言つていいのかわからんけど、もう九十八だし。逆に、ころつと諦めちやつてほんとにいいのつて感じだよね」

透風が日頃考へないようにしていることを、恐れず口にする。毅然としながら勞りが滲むさつきの横顔を見て、透風は返事をすることも忘れた。

それより何かいい方法ないかなあ。大ばあちゃんを奥宮に連れて行く方法、とさ

「もうええわ。帰ろか。寒いわ」
え。透風の両目がすつと見開く。今、何て？

ほれ、起こしてんか、と大ばあちゃんは透風に向かい、赤ん坊がそうするように両手を高く伸ばす。ふたりで抱き合つようにして立ち上がる。ほんと、大ばあちゃんが透風の腕に、泥のついた手で触れた。

「透風、お日いさんはな、どこにいてもお日いさんや。初日の出は、どこにいても初日の出や。さあちゃんと透風と一緒に見れたら、どこでもええわな。神さんも許してくれはる」

「でも大ばあちゃん、さつきが今、ひとりで山を下りて……」

何やねん。何なんや。

「もうええ、もうええ。やめやめ。寒うて待つてられへん」

子供の頃から聴こえていた大人たちの声が脳裏によみがえる。大ばあちゃんには困つたもんやわ。年いつてねえ、言うてることが……。しゃあないわ、だつて九十やもん。昔から頑固やけど、振り回されるこつちの身にもなつてほしいわ。

年せい。老いや余命を連想させる語句を口にし始めた大ばあちゃんが、ほんの少しずつ、はめてもはめてもボロボロと落ちるパズルのピースみたいに、元の姿を保てなくなつていく。同じ言葉の繰り返し。つじつまが合わない会話。朝言つたことを昼には忘れている。

これまであえて知らん顔で受け流してた現実を、パケツに溜めて一気に浴びせられたよう、透風は激しく動搖した。

「帰るで。さあちゃんとどこ行きよつた」

年のせい。大ばあちゃんは、悪くない。そう思おうとすればするほど、内側で感情が膨らんでいく。

己の力不足に対する悔しさ。大ばあちゃんに初めて怒鳴られた衝撃。努力したのに役立たずだと宣言された哀しみ。ひとつひとつが胸を潰すほど痛みを伴う透風の気持ちが、もうええわ、のひとと、いとも簡単に流された気がした。それだけではない。さつきや綾音²おばさん「さつきの母」の好意も含め、全てをなくしてよかつたことにされた、気がした。

大ばあちゃん、それならせめて、さつきにはあそこまで怒つてほしくなかつた。

「奥の神さん、お聞きの通りや。どうぞ堪忍してください」

大ばあちゃんが胸の前で小さな手を合わせ、奥宮の方角に向かつて頭を垂れた。

さつきを待たず、ふたりで山を下り始める。少しも進まないうちに、大ばあちゃんが再び足を止め、奥宮の方を振り返つた。

今年はじめ、ヒヨドリのさえずりが聞こえた。

窓から燐々と降り注ぐ光があまりにもまぶしく、目が覚めた。身を起こすと手にしていたスマホがごとりと落ち、液晶画面にふつと時計が表示される。八時二十分。傍らで、さつきが猫のようく身體を丸めて眠つていて。起こさないよう息を殺し、背後の障子を細く開けた。薄闇の座敷で布団はもぬけの殻で、庭から低く長く差し込む朝日を追つて視線を部屋の奥まで移すと、廊下側の襖が開いており、大ばあちゃんが立つていた。

透風、起きたんか。大ばあちゃんもな、寝過ごしてもうたわ」

そう言つて縁側まで歩み寄り、よっこいしょと畳の端に横座りする。

「はあー、ええ天気や」

気持ちよさそうに日を浴びる大ばあちゃんの顔に、山での険しさはない。「よう寝てるわ」と口元をゆるめ、節くれ立つた指でさつきの頭にそつと触れた。

数時間前に山でさつきを怒鳴りつけたことは忘れてはいるのだろうか。そのことを、どう思つているのだろう。聞いてみたい気もするが、聞いても仕方がないのだろう。今は言葉通り受け取ることに決める。

「大ばあちゃん。僕、目標ができた」

「何や」

「何とかして、一日も早く大ばあちゃんを奥宮に連れて行く。歩きやすい階段とか、スロープとか。桶口³はこの村でずっと色んなもんを揃えてきたんやから、僕も頭ひねつてどうにかする。あそこはやっぱり大ばあちゃんと行く場所やから」

僕らに奥宮の日の出を見せたいなら、何がなんでも一緒に来てもらおう。床の一点を凝視し、うんうんと自分にうなづく。さつきが言った通りだ。ころつと諦めたら、ながら大ばあちゃんは声を絞り出した。

駄目なのだ。

階段拾えるより、カラダ鍛えてオレを背負つたらええがな、などと言われるかと思つたが、大ばあちゃんは大口を開けて笑つた。かかか、といかにも愉快そうに鍛えたからではなく、多分ただの生理的な反応だろう。その涙を拭い、ひいひい言いながら大ばあちゃんは声を絞り出した。

「初笑いや。ええ初笑いや。今年はええ年になりそうや」

「冗談やないで。本気や」

「当たり前や。それでこそ樋口の男や。困難を切り開くのが樋口なんや。そうやつて村も家も大きゅうしてきたからな」

樋口の男。大ばあちゃんが透風に対して初めて口にしたことに、絶句する。大ばあちゃんだけは、その言葉を使わなかつたのに。

カチ、と歯車が噛み合つたがすかな感覚が胸に伝わる。背負えなくとも、いい。別のやり方でも、いい。あれほど嫌で嫌でしようがなかつた、「樋口の男」。その硬い輪郭がふつとゆるんだように感じた。

「さあちゃんとタイヤんにも手伝つてもらたらええ。皆で力を合わせてな」

大ばあちゃんが再び、さつきのこめかみをそつと撫でる。

「透風、ええお連れができたなあ。よかつたなあ」

お連れ。友だち。一応義理のいとこだが、血がつながつていらないせいか大ばあちゃんにとつてはあまり関係ないらしい。

⑥タイラと大ばあちゃんで成り立つ心地よい狭きせかい。そこへさつきは、——さつきは壁に穴を開けて入つてきた。

内側から何かが押し開いてくる気がして、透風は思わず胸に拳を当たた。不思議な感覚だつた。閉じ込めていた、というよりは閉じこもつていたものが自らの意思で顔を出すような。透風を守る境界線が、「友だち」の居場所を作るよう、外へ外へと広がつていくようだ。

「ええお連れや」大ばあちゃんが繰り返す。

広がつた分だけ、透風はおそるおそる歩き出す。どこまで行けばはしがあるのかわからぬせかいへ、ゆつくりと踏み出していく。

心の表面がくすぐつた。どんな顔をしてよいかわからず、顔中を両手でぐしごしと力任せに擦る。朝の光をたっぷりと浴びた頬が、暖かい。

問4 傍線部③「それはすぐ。すぐ——」に込められた透風の心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア タイラの言葉に勇気をもらつていた透風だったが、自分が同じような行動をしても周囲には受け入れてもらえない中、初めて理解を示してくれたさつきに感謝の念を抱いている。

イ タイラの子ども離れした行動力に驚きを感じていた透風だったが、自分も知らず知らずのうちにタイラと同じ生き方をしているのだとさつきに気づかされ、その事実に感激している。

ウ みんなにタイラの魅力を知つてほしいと思っていた透風だったが、さつきにタイラの良さを理解してもらえたことで、自分も微力ながら彼の役に立てたのだと誇らしく思つている。

問5 傍線部④「心の奥底に——引き出す」とあります、「そつと外に引き出」した「心の奥底に閉じ込めている気持ち」をたとえた表現を6ページの本文中から二字で抜き出し、答えなさい。

問6 傍線部⑤「おもちやに飽きた子供のような表情が浮かぶ」とはどのような様子を表していますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 集中して取り組んでいたことへの興味を失い、急に別のことへ熱中し始める様子。

イ 難しいことに挑戦してきたが限界を感じ、達成しやすいことを選ぼうとする様子。

ウ こだわっていた物事に対し、それまでの態度を一変させて何の未練もなくなる様子。

エ 大切にしてきた価値観が揺らぎ、どうしたら良いのかわからずに途方に暮れる様子。

指の隙間からさつきを見下ろすと、ようやくほんやりと瞼を開けた目が、鳥が羽根を伸ばすように長い睫毛をゆっくりと動かし、瞬きをした。

問1 太線部a 「画（する）」・b 「障子」の読みをひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「なまじ比喩ではない」はどのような表現に言いかえられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ぴつたりなたとえである
イ なまなましいなとえである
ウ 意外性のあるなとえである

エ 言いふるされたなとえである
オ 言いふるされたなとえである

問3 次は、傍線部②「タイラは、画面の——それでいい」と感じるに至つた透風の思いの変化についてまとめた文章です。空欄に入る最も適切な語を、それぞれ指定の字数の漢字で答えなさい。ただし、1・4は自分で考え、2・3は5ページの本文中から抜き出すこと。

初めは、「コイツ」という呼び方に象徴されるように、透風はタイラの言動が気になりながらも、どこかで「——」心も抱いていた。だが、ある時、信頼する大ばあちゃんと似た価値観をタイラのメッセージから感じ取ると、一気にして最も適切なものを後のア～エから選び、記号で答えなさい。

出来事	透風の心情・様子
大ばあちゃんからおぶつてくれるよう頼まれたが、背負えない。	(I)
大ばあちゃんから初めてきつく当たられる。	(II)
再度の説得と提案を試みたさつきが、大ばあちゃんに激しい怒りをぶつけられる様子を見る。	(III)
大ばあちゃんから「家に帰ろう」と言われる。	(IV)
奥宮の方を振り返る大ばあちゃんの言葉を耳にする。	(V)
大ばあちゃんからおぶつてくれるよう頼まれたが、背負えない。	(VI)

問8 波線部ア～オから読み取れるさつきの人物像の説明として、当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「自分の価値観で、——日々学ぼうとしてんの」という発言からは、自分とは異なる考え方を受け入れようとする柔軟さが感じられる。

イ 「自分もその前で両膝をついてまつすぐ言葉をかけた」からは、相手の目線で物事をとらえ、誠実に他者と向き合おうとする姿勢が感じられる。

ウ 「無言でスマホを取り出した」からは、余計なことは言わず、傷ついた友人の気持ちを救うために黙つて寄り添う優しさがうかがえる。

エ 「弱々しく——引き返していった」からは、自分に今できることを精一杯行い、果たすべきことから逃げない責任感がうかがえる。

オ 「雪が掌で——淡く微笑んだ」からは、予想外の出来事にあつた後でも、人を

問9 空欄A・Bに入る最も適切な表現を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 見たかった イ 見せたかった

ウ 見なかつた エ 見られなかつた

〔資料〕 次は□、□の本文と〔資料〕(鷺田清一「折々のことば」朝日新聞2021年7月13日朝刊)を読んだ中学一年生の三人が書いた感想文です。これを読み、後の問い合わせに答えなさい。

〔資料〕

多様性って、やっぱ覚悟いりまわよ。

上田假奈代

大阪・金ヶ崎で「じえど」とぼひじいの部屋」を主宰する詩人は、多様性は「自分にとつて居心地のいい人だけと一緒にいること」とは違うと。むしろ「招かざるお客さん」という「出会い直して」いくかが問題だと。であれば、時にその筆頭が自分であることも。認めたくない自分が自身の奥に居座る。『TURN NOTE TURNをめぐる言葉2020』から。

2083

折々のことば

鷺田 清一

Aさん
外見から他者を判断するということ自体は悪くないかもしれない、という□の文章の内容には共感しました。小学生の時、男子は黒色系のランドセル、女子は明るい色のランドセルが当然だという決めつけに疑問を感じたこともあります。そのため、【ア(二字)】観念と聞いたたら、それだけで悪いものに思えていたのですが、□では、逆に【ア】観念を利用した自【イ(二字)】のことが書かれています。自分がどのような人間であるかを【ア】観念によつて意図通りにとらえてもらえるように装い、振る舞うということです。それを体現したのが□の文章の『X』という登場人物なのだと感じました。

Bさん

□の文章で述べられているように、見た目から生まれる先入観は危険だと思いました。私自身、昔から母に「人に対して偏見を持つたり、【ウ(二字)】メガネで相手を見たりしないよう気をつけなさい。誰かを【エ(二字)】することにつながるから。」と言われてきたことを改めて思い出しました。□の文章からも、それと重なるメッセージを受け取りました。

Cさん

私自身、自分と考え方や見た目が異なる人と出会った時、明らかに決めてつけや偏見を持たないよう気を付けて過ごしていだつもりでした。そんな時に〔資料〕を目にし、多様性を認めるために大切なのは、そもそも【エ(二字)】にある、他者や自分自身に対する考え方がどうであるか」なのだと気づき、はつとしました。そう考えると□の文章は、透風が他者との関わりにおいて成長した物語であると同時に、透風が【オ】物語であるともとらえられると思いました。

問1 空欄Aに入る適切な表現を考え、指定の字数の漢字で答えなさい。

問2 空欄Xに入る人物名を□の本文中から抜き出し、答えなさい。

問3 空欄Yに入る適切な表現を〔資料〕の中から四字で抜き出し、答えなさい。

問4 空欄オに入る適切な表現を考え、十五〜二十字で答えなさい。